

平成 29 年度事業報告

(自 平成 29 年 2 月 1 日～至 平成 30 年 1 月 31 日)

公益社団法人 日本薬学会

I はじめに

日本薬学会は、1880 年に創設された我が国有数の学会であり、薬学における中核的学術団体です。薬学のアイデンティティーは「くすり」であり、新薬開発、医薬品の創製、製造、安全性と有効性、供給、適正使用、生体での作用機序など広範に及びます。少子高齢化や人口減等、我が国の置かれている現状を考えると、医薬品関連産業や健康・医療関連産業は、重要な意味を持つと考えられ、学術的基盤の一つとして日本薬学会が発展していくことが望まれています。これらを前提とし、平成 29 年度に取り組んだ代表的な事項について以下にまとめました。

- ① 137 年会の開催：日本薬学会の最大の学術活動となる 137 年会在、平成 29 年 3 月 24～27 日の 4 日間、「復興と発展、薬学の未来へ」をテーマに仙台市で開催されました。東北医科薬科大学の遠藤泰之組織委員長の下で開催された年会では、活発な発表と討論が行われました。また 136 年会の大村智北里大学特別荣誉教授に次いで、本年度は大隅良典東京工业大学荣誉教授によるノーベル賞受賞記念特別講演が行われ、多くの会員の刺激となりました。
- ② 支部活動・部会活動：各地域に根ざした 8 つの支部では、支部大会や講演会など、それぞれの計画に基づき活発な学術活動を行いました。支部によっては、地域の薬剤師会との連携や合同大会などが組まれました。また広範な学術分野をカバーする専門性に基づく 10 の部会では、各分野に関わる学術研究を推進するために計画に基づき活動を行いました。
- ③ 学術誌の充実と学会情報の発信：学術誌の更なる充実発展を目指し、YAKUGAKU ZASSHI、Chemical and Pharmaceutical Bulletin、Biological and Pharmaceutical Bulletin の出版までの作業を迅速、正確かつ効率的に行う体制にて運用しました。J-STAGE と連携し、国際発信力の強化に努めました。また、幅広い分野で充実した内容の会員情報誌であるファルマシアでは、最新の情報を提供しました。
- ④ 創薬セミナーの開催：本年度も創薬に係わる情報提供と情報交換の場として、八ヶ岳ロイヤルホテルで創薬セミナーを開催しました。企業関連の会員が減少傾向にある中、企業からの参加者が新たに本学会会員に加わって頂くことになりました。
- ⑤ 日本学術会議との共催シンポジウム：日本薬学会と日本学術会議が共催したシンポジウムを開催しました。また、日本薬学会教育委員会と日本学術会議薬学部会薬学教育分科会との共同で薬学分野の参照基準を作成し、日本学術会議より報告として発信しました。
- ⑥ 研究支援事業：今年度も大学院博士課程院生への長井記念薬学研究奨励支援事業を継続するとともに、新たな大学院学生を選択し、薬学関連の分野等で将来の活躍が期待される大学院生の勉学支援が行われました。

II 事業実施状況

1 代議員総会の開催

日 時：平成 29 年 3 月 24 日（金）

場 所：仙台国際センター

2 学術研究・教育活動の推進

1) 学術誌の発行

日本薬学会発行の学術誌 3 誌の特性を最大限に活かした原著論文・総説の掲載により、薬学ならびに関連分野における科学の発展に寄与してまいりました。また、国際的高度情報化社会の趨勢と、本学会の公益性を視野に、J-STAGE（科学技術振興機構）を利用した全文公開による情報発信をいたしました。

本学会の学術誌への投稿意欲を高めるために、査読期間の短縮、出版までの作業の効率化を継続的に推進してまいりました。

YAKUGAKU ZASSHI では臨床薬学領域研究の多様化に対応するため、臨床薬学領域の英文投稿およびケースレポートを受け付けました。

Chemical and Pharmaceutical Bulletin ではテーマを絞った、興味深い内容のカレントトピックスを掲載しました。国際創薬シンポジウムの発表者にカレントトピックスへの掲載を依頼しました。

Biological and Pharmaceutical Bulletin では誌面の充実を目的とし、国内の著名な研究者に総説の執筆を依頼いたしました。

平成 29 年度の学術誌の刊行は、以下のとおりです。

① YAKUGAKU ZASSHI 第 137 巻

掲載論文数：184 編／昨年比 17 編減

（早期公開 11 編／昨年比 4 編増、英文投稿 6 編／昨年比 2 編減）

発行部数：700 部（月刊）

② Chemical and Pharmaceutical Bulletin 第 65 巻

掲載論文数：168 編／昨年比 81 編減 *昨年は Special Section 50 編含む

（早期公開 28 編／昨年比 24 編減 *昨年は Special Section 9 編含む）

発行部数：700 部（月刊）

③ Biological and Pharmaceutical Bulletin 第 40 巻

掲載論文数：311 編／昨年比 24 編増

（早期公開 63 編／昨年比 10 編減）

発行部数：700 部（月刊）

2) 学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援

(1) 年会の開催

年会は、領域の異なる研究者が一堂に会して、薬学の進歩を横断的に知ることのできる全国規模の大会です。特にシンポジウムの企画・募集にあたっては、多様な領域を包含できるものとなるよう留意してまいりました。第 137 年会および第 138 年会について、組織委員会を中心に次のとおり開催ならびに企画しました。

① 第 137 年会（仙台）

日 時：平成 29 年 3 月 24 日（金）～27 日（月）

場 所：仙台国際センター他

テーマ：「復興と発展、薬学の未来へ」

組織委員長：遠藤 泰之（東北医科薬科大学薬学部）

②第 138 年会（金沢）

日 時：平成 30 年 3 月 25 日（日）～28 日（水）

場 所：石川県立音楽堂、金沢市アートホール他

テーマ：「次世代に向けた創薬・医療イノベーションの今」

組織委員長：向 智里（金沢大学）

（2）部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者や薬学生の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会等を開催するとともに、創薬研究者の育成等、各部会の環境、状況にあわせて特色ある活動を進めてまいりました。また、部会間で協力し、他機関との連携を図りました。

（3）支部の活動

支部は、会員が日本薬学会を身近な存在として活用できる場です。学生会員の積極的な参加を促す学術集会、地域薬剤師会との交流、薬学講習会での最新情報の入手、支部表彰事業ならびに高校生への薬学ガイダンス等地域の特性を生かした事業展開を行うよう努力してまいりました。一般社会へ薬学の正しい理解を広げるとともに、若い世代へ積極的に働きかけを行い、会員増強運動を進めました。

（4）創薬セミナーの開催

本セミナーは、創薬に係わる最先端の話題と情報を提供し、今後の創薬に関して有益な議論をする場として、毎年開催しております。第 33 回セミナーでは、前回と同様に、社長講演、招待講演、自由討論会等を実施して、若手創薬研究者がグローバルな視野で最先端創薬を考える場を提供しました。

・第 33 回創薬セミナー

日 時：平成 29 年 7 月 12 日（水）～14 日（金）

場 所：八ヶ岳ロイヤルホテル

3) 学術研究・教育活動の奨励・表彰

（1）研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者を輩出することを使命として、学位を取得するための研究奨励支援を行うべく、平成 27 年度より採用者へ奨励金の貸与を開始しました。平成 28 年度より設置しました長井記念薬学研究奨励特別委員会では、運用手続きの整備を行いました。当年度採用者を加え、貸与を継続し、また、選考委員会による選考結果を受け、平成 30 年度採用内定者を決定しました。

（2）授賞

薬学研究の奨励・表彰は、日本薬学会の目的である薬学の進歩・普及にとって重要な事業です。授賞規定に基づいて選考された公正な選考結果を受け、平成 30 年度学会賞受賞者を決定しました。

- | | |
|---------|-----|
| ① 薬学会賞 | 3 件 |
| ② 学術貢献賞 | 2 件 |
| ③ 学術振興賞 | 4 件 |
| ④ 奨励賞 | 8 件 |
| ⑤ 教育賞 | 1 件 |

- ⑥ 功労賞 1 件
- ⑦ 佐藤記念国内賞 1 件

(3) 他機関関係賞等への推薦

各財団・機関から本学会への関係賞等の推薦依頼に対し、会員から候補者を選考し、推薦しました。さらに、国（省庁）による表彰について会員から候補者を推薦しました。

4) 薬学教育基盤の整備

薬学教育に関する諸課題について、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、日本医療薬学会、薬学教育協議会、全国薬科大学長・薬学部長会議ならびに日本学術会議薬学教育分科会等と連携し、取り組みを推進してまいりました。また、日本医学教育学会や日本保健医療福祉連携教育学会、日本薬剤師研修センター等の論議の場に参画し、協働して検討を進め、コンセンサスを図るよう努めてまいりました。

(1) ワークショップの開催

本年度は日本薬学教育学会との共同主催として次のとおりワークショップを開催しました。

- ・第3回若手教育者のためのアドバンストワークショップ

日 時：平成29年8月5日（土）～7日（月）

場 所：クロス・ウェーブ府中

テーマ：「卒業時における教育の質保証 –卒業時に求められる資質・能力とその評価を考える–」

実行委員長：大津 史子（名城大学薬学部）

- ・第7回全国学生ワークショップ

日 時：平成29年8月11日（金）～12日（土）

場 所：クロス・ウェーブ府中

テーマ：「医療そして社会への貢献 ～私たちの未来を語ろう～」

実行委員長：高橋 寛（岩手医科大学薬学部）

(2) 文部科学省委託事業の実施

平成29年度大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業の「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」を受託しました。改訂モデル・コアカリキュラムの英訳を進めるとともに、海外調査に赴き、英訳したモデル・コアカリキュラムへの意見を聴取し、調査を行いました。

(3) 第三者確認作業の開始

社会に資する生涯研鑽支援活動の一環として、健康サポート薬局に係る研修プログラムを確認するための第三者機関として、平成28年に厚生労働省から指名を受けています。今年度は新規申請のあった1機関に適合通知を発出したほか、前年度に適合とした5機関からの更新申請を受けて確認作業を行い、5機関に適合通知を発出しました。

3 学会情報の配信

日本薬学会の大きな役割に、信頼できる科学情報を発信していくことが挙げられます。薬学の学術教育研究、医療における薬学の貢献、さらには薬学分野の行政・産業等の最新の動向を、会員間のみならず広く社会と共有し、医療健康福祉社会の発展に寄与するた

めに、最適な手段と場、媒体を準備・提供し、会員間の情報交換および会員と非会員・社会一般との接点を拡大し、情報の交流を促進しました。

(1) 社会への発信

「抗菌薬適正使用支援プログラム実践のためのガイダンス (GUIDANCE FOR IMPLEMENTING AN ANTIMICROBIAL STEWARDSHIP PROGRAM IN JAPAN)」を8学会合同抗微生物薬適正使用推進検討委員会(公益社団法人日本化学療法学会・一般社団法人日本感染症学会・一般社団法人日本環境感染学会・一般社団法人日本臨床微生物学会・公益社団法人日本薬学会・一般社団法人日本医療薬学会・一般社団法人日本TDM学会・一般社団法人日本医真菌学会)により公表しました。

本ガイダンスは、他国と医療制度、施設背景、人口動態、国民性あるいは使用可能な抗菌薬が異なる我が国の現状に対して、人に対する抗菌薬の適正使用を推進し、耐性菌の発現あるいは蔓延を抑制させる目的を達成するために、抗菌薬適正使用に関わる医師、薬剤師をはじめとした専門スタッフ、それを支える行政機関、病院経営者が行動すべき内容をまとめたものであります。医療施設でこれから新たに抗菌薬適正使用支援に取り組もうとされる場合の参考となることが期待されます。

(2) 会誌の発行

会誌「ファルマシア」は、会員の広報誌として内外の情報を分かり易く提供し、また会員相互のコミュニケーションの円滑化をはかることを基本として編集しております。学会広報および情報誌として一層の充実をはかるべく、特集号(6回)とミニ特集号(5回)の企画を含め、年間12号の発行を実施しました。J-STAGE 登載の周知や最新情報の発信に向け、HPの迅速な更新を努めました。

第53巻 発行部数 約17,300部(月刊)

(3) ホームページの更新

学会の最新情報の掲載ならびに会員へ向けての情報公開に日々努めました。対外的な情報発信を強く意識し、若い世代へエールを送り、薬に関心を持っていただけるようページを更新しました。

(4) メールマガジンの配信

メールマガジン「ファームナビ」は、配信を希望する Pharm パスポート登録者に「日本薬学会理事会だより」として日本薬学会の動向やメッセージを速やかに配信し、学会情報の共有化をはかりました。また、外部からの要請に応え、会員への一斉送信用のツールとしても活用しました。

配信4回 配信数 18,285名(平均)

(5) 刊行

薬学普及啓発誌の「高校生のための薬学への招待」と「これから薬学をはじめあなたに」は、年間の利用は30,000部に達しています。高校生の進路指導資料として、また大学1年生のガイダンス資料として、薬学ならびに薬学部への正しい理解と知識を深めることに寄与しています。

また、ホームページの連載コラム「薬学と私」の第1回から第50回までを「薬学と私ーこれから薬学を目指す方へー」として新書版の書籍にまとめて発行しまし

た。手に取りやすい形で、既存の啓発誌 2 誌とともに普及啓発指導用・進路指導資料としての活用を期待しています。

4 他機関との交流協力とグローバル化の推進

1) 他機関との交流協力

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献するよう努めました。

① 日本学術会議との連携

薬学の存在感を高めながら、我が国の科学技術の推進に寄与するため、科学者コミュニティを代表する機関である日本学術会議薬学委員会との連携・協力を保ち、共同主催にて以下のシンポジウムを開催しました。

・「がんと代謝 ～新たな研究領域の創生から革新的な治療薬開発へ～」

日 時：平成 30 年 1 月 12 日（金）

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本学術会議薬学委員会化学・物理系薬学分科会、生物系薬学分科会

② 共催・協賛・講演

本学会と密接な関連をもつ団体の講演会、学術集会を共催、協賛あるいは後援（開催：国内 164 件、国際 13 件）し、積極的に支援してまいりました。

③ 日本化学連合への参画

④ 日本学術振興会への参画

卓越研究成果公開事業におけるデータベース改修ならびにデータ掲載に向け協働しました。

2) グローバル化の推進

国際機関との交流をはかり、世界の学術振興に寄与しました。

① 国際薬学連合（FIP）への対応

・FIP 第 77 回年会（9 月 9 日～9 月 14 日、ソウル）をはじめとする FIP 事業への支援を行い、代表者 6 名を派遣。また、第 137 年会にて FIP フォーラム 2017 を開催。

② 代表者および講師の派遣・招聘

・ドイツ薬学会

ドイツ薬学会 2017 年会（9 月 29 日～29 日、ザールブリュッケン）に代表者 2 名を派遣

・アメリカ薬学会

講師 2 名を招聘し、第 137 年会にて合同シンポジウムを開催した。

・韓国薬学会

講師 2 名を招聘し、第 137 年会にて合同シンポジウムを開催した。

5 学会基盤の整備・確立

1) 会員関連

(1) 会員数増強への取り組み

次世代へ向けて、より一層の発展を目指すためにも、会員は、学会の基盤であり財産です。多岐に亘る薬学の学術の魅力の向上を計り、会員数増強へ繋げてまいりました。

(2) 会員登録状況

会員数（平成 30 年 1 月 31 日現在）	17、431 名
正会員	17、158 名
（一般会員	14、518 名）
（学生会員	2、640 名）
永年会員	192 名
有功会員（第二項）	40 名
名誉会員	41 名
賛助会員	207 機関

平成 29 年度末（平成 30 年 1 月 31 日）現在、正会員のうち 1、085 名が平成 29 年度会費未納者でした。

(3) 名誉会員の推薦

定款第 5 条に基づき、理事会において名誉会員候補者 1 名の推薦を決定しました。

名誉会員 遠藤 玉夫

(4) 有功会員および永年会員の決定

定款第 5 条に基づき、理事会において有功会員 1 名と永年会員 22 名を決定しました。永年会員には、記念品を贈呈いたしました。

有功会員 石橋 弘行

永年会員 浅井 一	伊坂 一郎	板谷 幸一	今成登志男
柿内千枝子	紀氏 健雄	小石 眞純	斎藤 守弘
嶋田 健次	清水 勝造	杉田 直典	鈴木日出夫
富山 剛	中田 尚男	長浜 昇	成戸 俊介
橋本 直人	藤江もと子	宮野 和子	村上 泰興
村田 正弘	柳瀬 良文		

2) 財政基盤の確立

(1) 賃貸収入と会館の運営

学会運営は、会費と学術事業収入等の経常収入によって賄われるべきものですが、本会では会館の賃貸収入をもって学会運営の財務基盤を補完しております。賃貸事業は社会情勢の影響を多分に受けることから、常に状況把握を行い、管理代理者である三菱 UFJ 信託銀行と連繋を密にし、運営基盤の安定化に資するよう努力してまいりました。

学会が管理する会館施設の運営は、会員の利用施設としての有効活用と、一般社会への開かれた学会としてのイメージアップのため、委託先のビル管理会社と協力して利用者の便に供するよう努めました。

(2) 長井記念館の維持管理

当館の経年劣化に伴う修繕計画について、三菱 UFJ 信託銀行を始めとする関係各社からの情報を基に、主体的に把握するよう努めてきました。平成 29 年度には、空調改修を行うべく 10 月に工事契約を締結しました。工事は平成 31 年 3 月に終了する予定です。

(3) 公益法人としての取り組み

公益事業を主たる目的として、公益性を重視した事業の実施ならびに公明な会計を行うことを周知徹底いたしました。

また、公益法人として篤志を受けた寄附者のお名前をHPに掲載しました。

平成 29 年度役員一覧

会 頭	奥 直人 (静岡県大薬)	
副 会 頭	佐々木茂貴 (九大院薬)	高倉 喜信 (京大院薬)
	向 智里 (金沢大)	
総務担当理事	奥田 晴宏 (国立衛研)	大和 隆志 (エーザイ)
	平井みどり (神戸大病院薬)	
財務担当理事	石井伊都子 (千葉大病院薬)	松永 浩和 (武田薬品工業)
広報担当理事	菊池 寛 (エーザイ)	賀川 義之 (静岡県大薬)
国際交流担当理事	周東 智 (北大院薬)	國嶋 崇隆 (金沢大)
編集担当理事	新井 洋由 (東大院薬)	土井 健史 (阪大院薬)
学術事業担当理事	春田 純一 (阪大院薬)	宮澤 宏 (徳島文理大香川薬)
	山崎 裕康 (神戸学院大薬)	青木 一真 (第一三共)
	寺崎 哲也 (東北大院薬)	
監 事	大島 吉輝 (東北大院薬)	近藤 裕郷 (医薬基盤研)
	高柳 輝夫 (ヒューマンサイエンス財団)	
顧 問	太田 茂 (広島大院医歯薬保)	

平成 29 年度委員会・支部・部会一覧

常置委員会

役員候補者選考委員会	奥田 晴宏 (国立衛研)
代議員選挙管理委員会	奥田 晴宏 (国立衛研)
学会賞選考委員会	玉井 郁巳 (金沢大院医薬保)
教育賞選考委員会	入江 徹美 (熊本大院生命科学)
佐藤記念国内賞選考委員会	堀江 利治 (帝京平成大薬)
創薬セミナー委員会	大島 吉輝 (東北大院薬)
広報委員会	米持 悦生 (星薬大)
ファルマシア委員会	松木 則夫 (東大名誉)
学術誌編集委員会	細谷 健一 (富山大院薬)
薬学雑誌	鈴木 匡 (名市大院薬)
CPB	竹本 佳司 (京大院薬)
BPB	大槻 純男 (熊本大院薬)
総務委員会	高倉 喜信 (京大院薬)
人事委員会	奥 直人 (静岡県大薬)
財務委員会	高倉 喜信 (京大院薬)
国際交流委員会	佐々木茂貴 (九大院薬)
年会問題検討委員会	奥 直人 (静岡県大薬)
薬学教育委員会	赤池 昭紀 (名大院創薬)

特別委員会

長井記念薬学研究奨励特別委員会 佐々木茂貴 (九大院薬)

男女共同参画委員会

高倉 喜信（京大院薬）

支部

北海道支部	伊藤 慎二（北海道薬大）
東北支部	永田 清（東北医薬大薬）
関東支部	川西 徹（国立衛研）
東海支部	稲垣 隆司（岐阜薬大）
北陸支部	荒川 靖（北陸大薬）
近畿支部	河野 武幸（摂南大薬）
中国四国支部	大塚 英昭（安田女大薬）
九州支部	平山 文俊（崇城大薬）

部会

化学系薬学部会	向 智里（金沢大）
医薬化学部会	高山 廣光（千葉大学院）
生薬天然物部会	掛谷 秀昭（京大院薬）
物理系薬学部会	嶋田 一夫（東大院薬）
構造活性相関部会	中川 好秋（京大院薬）
生物系薬学部会	青木 淳賢（東北大院薬）
薬理系薬学部会	南 雅文（北大院薬）
環境・衛生部会	永瀬 久光（岐阜薬大）
医療薬科学部会	千堂 年昭（岡山大病院薬）
レギュラトリーサイエンス部会	川西 徹（国立衛研）